



假夷談筆記

完

地  
天  
完

和装本

ル 4

3999



門 4  
號 3999  
卷

搬夷談筆記



○搬夷地の松子山ありこの地もくわくく人家皆  
海邊に在り漁獵を以て業とし耕作は未だあり  
○搬夷地と相和の境より西へは山ありと記す  
西に在り田は乙類を以てし其地ありと記す  
○搬夷地富川魚げと記す是れ人間得許し入交  
搬夷人居るは志やも得許しの中に入交しては  
宅はるは好む中か修む搬夷地引入して近年  
はるるありは成田は乙類ありと記すは瘡瘡  
小我ては記すは大方統中事

信陽上田  
成澤蔵書

○古より世に傳へたること甚しく人を知るべきに  
此の書は死はたむ物目にしてかゝつたは大方  
に剛強ある者自身を以て死に成りて年とびてな  
らざる者に志摩守と云ふ一國の支死するは来り  
る人往る者支死乃志るる中を相皆傳へての事  
志摩守と云ふは世に傳へたる毎年相和して傳へる  
通冠と云ふは世に傳へたる某法制定の事にして  
此の書威光を怖るる人々も亦傳へたる事なり  
○相和れば子人相和らるるは船を以て高貴  
死生業といはれ世に傳へたる事なり也



捨はるるの業ありて捨てたまはれ又虎杖の  
竹の根れりてさきさきとてなかりて根分けしこと  
申すも粟稗ありて他り申すも申すも穀物土地  
を食ひて大食小食角は仇お子お七年の死  
作りの申すは津州の死の事なり越後にて二年  
田作はるる事なり大食の事なり申すも申すも  
子孫の申す事なり  
○熊夷地年賣物納るる事なり志摩守は目  
申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも  
申すも申すも申すも申すも申すも申すも申すも

吉利より改めははれし徳人教不の事也  
○搬表地小は方北人なる事不し其年ハ其海原  
師あり居居はとる事やす一やめん思ひ一は金  
力あり後人なる事不し其年ハ其海原  
は其地清より其年ハ其見し一やめん  
居不し其地北より其年ハ其海原者其年ハ其  
系ハ其年ハ其馬足なる事不し其海原  
ハ徳順風小なる事走ると其年ハ其海原  
事ハ其年ハ其事ハ其年ハ其事

○西の方より何しは一とす相表より其来

は徳順風ハ其年ハ其事ハ其年ハ其事  
後日方里行ハ其年ハ其事ハ其年ハ其事  
らつハ其地持系ハ其方ハ其年ハ其事  
ハ其年ハ其事ハ其年ハ其事ハ其年ハ其事  
昔より其年ハ其年ハ其年ハ其年ハ其年  
中にお入之年ハ其年ハ其年ハ其年ハ其年  
のらつハ其年ハ其年ハ其年ハ其年ハ其年  
地ハ其年ハ其年ハ其年ハ其年ハ其年  
○相表の者搬表地小高ハ其年ハ其年ハ其年  
少なるハ其年ハ其年ハ其年ハ其年ハ其年

い者たえしく海中に船をたぎらしたる後たりの  
いぬたしと通はる事

○船夫人之父子兄弟もお嫁いとしておの中にて  
縁起は他人不交相といを一人に女身四々又六  
七八人つ持中い此とい者なり多持中い此い高業  
い此とい又い此所の内よそい別い家を三取にい此  
名戸にい取小持中い事い名は女身たにい名中女  
成犯とい何いはの毛を一本い名持おきいしてせの  
んは若女の方とて忌慕いして犯とい女の年とい  
を男の方い名とて金銀いおきい時たの年といを

おい六男をいゆい女をいり右い通せんは  
向論女を男を人よりお持いりいああ若女  
に男持いおあとい名乃とんい通い申す

○科人右いいい人いはたきい中い色をいい  
おいそのい子あまたい事記い通いちい通い  
及難い秘い此宮持二十果い此あい出いけい  
のいい免ゆるい申す

○物いてお持物を何いりも堂殿はる殿後をい  
れおいけいけ方にて通い名中物をい具いも又  
かたいもい持あとい代物等いはいい入い代物

乃多分致不諱何存も出して誓中由り  
○古事はもと又八咫物振代に持持て物持はるも  
有るも持持者一人の事知し外に徳も金子も持  
事を知りしをわしの子細徳家持持一人も志れ  
しに何れも難致中を之に〜あつたりしに徳持本  
一不中内八咫物中を在也此は事

○金路のたがもつてやさし高き其代持持  
はるも金事、魚事、その木の葉を角羊も有るも  
終中、衣、唐、和、披、有、合、り、用、中、の、病、有、  
時、之、葉、木、の、葉、を、各、持、持、は、る、も、醫、師、は、る、も、

配利手ははる事

○海、好、く、流、り、下、川、大、方、さ、り、は、方、持、持、の  
海、を、代、持、持、は、終、中、又、何、海、海、を、作、り、此、方、の  
者、も、持、持、は、る、も、終、中、持、持、者、大、に、之  
の、後、し、者、も、中、事、

○文字、通、車、事、も、さ、り、も、長、女、の、通、海、も、お、知、り、  
中、に、本、唐、は、は、通、海、も、中、事、

○神社、之、も、神、の、子、を、お、り、い、と、中、に、何、の、神、  
を、教、り、し、や、山、海、火、水、向、千、教、拜、中、の、事、

○北、の、衣、死、骸、骨、を、た、り、お、り、入、り、内、掛、刀、梅、梳、

此の如く其具の形もよれりて入中の位に其  
少は魚肉日向中の暮不に下にも木ありて平  
あるを立立裁刀うけ並中の位俾津枝の之を  
向論精を不はの申想て夜瘡疹必死の在る身  
の者を六打控也申あり

○相承を述べてもて志辱を友が来候地小別  
候有りてを畠外少に付て下も年及ハ納不中  
鯉を役昇平而役薪役斗おく花お納山の  
治と申すも之を枝木入申す牙の供不伐採地類  
一に納高少に付は申す

○猪猪牛を飼ふ馬を育む事などハ總て古記  
にありて入候至十月中新子膳を食す候之を  
酒と申すありて申すものなり初ハ女の  
吾を猪と飼ふ成せとハ魚を喰はす身の中ハ  
熊の糞菜力弱く申す至十月におきて大木を  
首を獲て首たてて此の糞をわすてを男也と  
十人まで押殺候を食肉を食は候申すは候を  
病に仕ふ候も一付二付と高公大きたちを  
少はて申候も申すやしと申す候の候は  
合候申事



あつゝんひ等也矢に終く二つぬあり難いあり  
此方れ海難い候のわいこくよりある百難ふ  
毒を毒をよき毒の方候とさかし合て用方の  
毒の候あんにくと物を交合をぬりてよき  
又毒の候よりある物を食物にて毒くす名候へ  
名を毒をなすことよき毒にて肉燻を毒く  
り名をたれは痛ふ中他一す斗より毒く入ふ  
すものよき候の毒らハをんこああまて候意  
く一日中人掛刀といふ日本の刀をおぼす用  
よき候此す名物難いをんけさくす毒に事

ユツ語テニコト云

の根をあらたしんえん根をさし刀をいふこ  
さしん人を根をて候あかあかの目ふかきりあ  
まの川に死人をお押さる沙汰事よき日本は  
れとくいふをくくすものあつちにはああ  
を名用又あいと云々の候はとく用あり  
○酒を飲むに毒に候中よきかきよきのませ  
かた小なりを一本のせはをつきおに根を人  
を毒をくぬき著にて毒れよきまきり  
後著の千はを他小なり又たの毒れ候  
又いふの上をくぬきお著の千はを





○此名を撰妻人の名

ゆとら

ちるぬ

しほ

魚さか

もろい

せたあ

りい

おふき

ちら

ちい

ろく

たせ

くねま

しちろ

ちやひ

ちんけ

アをい

もろけ

あちん

しん

ちん

男一人

女

ちん

ちん

ちん

ら

か

○此名を撰妻人の名

魚んけい

世にあらざるに細くおのちのちも物を學マナば  
いづれもあつたに乳をたのむる事をた  
ねとて我まゝにせしめぬれは嗜を治らば  
しるすはちち船中たぬり又我々の年  
の教へたるをせり

○この世に生くるもの候御事にはいづれも入つては  
いづれもいづれも執りし事や世にあらざる  
に言ふにせしめたるを辨別せしめたるに  
斗にせしめたるは海にせしめたるに自ら  
せしめたるは我々の後知りし世に生くる事

に好む物くせしめたる斗にせしめたるは自由を  
はせしめたる

○志ある人此の世に生くる毎日の物も有り  
耳ふるに物を辨別せしめたるにせしめたるは  
世にあらざるにせしめたるは又世にあらざる  
定むるにせしめたるは女は自らせしめたる  
にせしめたるは世に生くるにせしめたるは  
○世に生くるにせしめたるは世に生くるに  
世に生くるにせしめたるは世に生くるに  
死の高貴にせしめたるは世に生くるに

○具足にあまじしと華にする人細おは  
甲たふむかしと申す中であてはるは是は小とほる  
しつ矢よけおはも奥あす人との具足はあま  
持しし有るは是は御守はけしに書地は書  
不具足しとせしむは御守は先志無事は後代より  
法友には名懸くも申すある人あ持はるもは  
救急やふるるての御守はあまじし  
○志る人細御力のよやまたたけおれおれは  
たまに入あむと申すも甘は四の能持あむ  
お申すは御守今に申すも能持あむと申す

を持はるもの御守は御守の御守の  
候とおそししは御守の御守

○古志もあむと申すも申すの用するあむと申す  
よりかきし申すも申すの御守は御守の御守  
あむと申すも申すの御守は御守の御守  
お申すも申すの御守は御守の御守  
ししは御守の御守は御守の御守  
御守の御守は御守の御守  
ししは御守の御守は御守の御守  
御守の御守は御守の御守  
ししは御守の御守は御守の御守

中か〜とゆへに相前の西にありぬ

○摺美の六段のいふもろ考を持掛刀とていふに

出らば古刀をばいふ無し也の物をおもむ

事ハきしひふいして記すも是ハる意の中にあり

時ちうん控しもあまのよ〜月のこに全義の意を

日あ人のこと〜勝ふをいふはなり

○摺美の上に積みたれ相藏のこと〜中に油のお

物の行へ金にては紙を織り持てと事なる

藏持なり

○まゝのいひあり〜ゆの方に高き葉より

はりや水は付る相前なり〜とて紙の味はハ

紙の物をおもむ〜たれは紙を持ちや不あ知し

持てとて紙を碎く〜とて色ハ交りとていふは

中に付る六段摺美なり〜常憲院様也代

紙の味ハ紙の味にき〜に極り紙とは

紙の味ハ紙也

○ちいさい〜ゆと〜あまて紙を持ち紙積あり

ら子斗物を持ちひ〜あ〜ものにお尋はは若

け第一小の意の志ハ大年平上とて又ハ葉と方

人斗中にぬき〜紙とは〜紙の味とおはる

とらぬち移すて振ふる物にちいす子乃あぢ  
と中び細乃らゆけり是をあらねとせぬ  
ちて未かすて我控を拾りてちいす子乃あぢ  
は用ひて瘡をちりぬ又いしん瘡よきいり  
たてありのちいす

右あぢのみ

佃師のちいす子乃あぢ

木のけしき

枝のちいす子



振る地衣の物

其の物 足衣 山履の物 小倉平巻

馬舟 小倉くまじやう

結帯 其の物 色違ひのちいす子

戸袋 巾頂 志衣

かき物 織物 同木抄

臘油 同馬斗利

昆布 糸衣 西元

鯉 干鯉 糸子 鯉其割 結枝 陸引

鯉 糸子 干鯉 糸と鯉と

鱈魚皮 鯨油  
 梅鹿皮 あさじは  
 こつこの皮 阿そーの皮 鯨皮  
 鹿皮 五年ハカウ  
 串地 鯨 石備鯨 指鯨 丁鯨  
 魚油 鯨油 鯨油 推羊 黒苔

どの皮は... 知... 年...

搬来言葉集

一リキタ	天	一シリカタ	地	一ウカフツツ	日
一クニ子ツプ	月	一ノ千ウ	星	一バイカル	春
一ニヤツテ	夏	一ツニテ	秋	一ニタ	冬
一トウ多ニ子	正月	一フウプ	二月	一キウタ	三月
一モキウタ	四月	一ニキウタ	五月	一ニウキツプ	六月
一ニイホラケ	七月	一ヤルヒ	八月	一ウレホ <sup>サカ</sup>	九月
一ニ子アミツラ	十月	一クヌカヘ <sup>サカ</sup>	十月	一ツフカプ	十月
一キムラ	山	一アツイ	海	一ナサ	沢
一ベツ	川	一モシリ	島	一シリ	磯

一レラ	風	一アフト	雨	一ウバレ	冬
一メナシ	東	一シユム	西	一ヒカタ	南
一ニクナラ	北	一クニ子	黒	一レタル	白
一フウレ	赤	一シウ	青	一千クニ	木
一ムシ	草	一ヌブイケ	花	一イベ	木
一トウカフ	書	一アシカル	夜	一シリクニ子	木
一ユキイ	讀	一ラム	低	一セツフ	産
一フツ子	核	一タニ子	俗	一タキ子	短
一バセ	重	一ヨニ子	珍	一ツイナシ	早
一モレイ	運	一トウベニ	甘	一シウ	苦

一アルカ	幸	一シツポルシヌ	辛	一ヒルカ	糖
一ウエニ	悪	一イヨエ	煩	一ラムラツケ	鼻
一ツミ	軍	一クフ	弓	一クワカ	子
一アイ	矢	一ハラヲツフ	池	一キミフ	子
一クツ	帝	一エモシ	カ	一エヒリケ	小
一コタニ	國	一カムイ	神	一シヤラカムイ	仙
一カムイトノ	影	一レニガコルニシハ	老	一ニシハ	侍
一ヤクニヤモ	平	一ウシライ	下	一メクニ	女
一フルクナ	秘	一ヨツカイ	男	一マキ	妻
一ハンベ	父	一ハポ	母	一コツキ	母

一ホク	夫	一ホ	子	一ユビ	兄
一アチヤ	伯父	一ウナルヘ	伯母	一ツヒシ	妹
一アキ	弟	一シヤ	姉	一ヌユリ	姉
一チカフ	名	一セツフ	魚	一カツカ	水
一セツカ	湯	一アベ	火	一シユ	燭
一イタキ	梳	一ツキ	盃	一ベケレ湯	湯
一ヤ、サケ	湯	一アマモ	米	一シケアモ	食
一ビルケフ	白米	一ヲハ	汁	一ルウ	道
一シ子ツプ	一	一ツフ	二	一レフフ	三
一イ子ツプ	四	一アシキ子フ	五	一ユビ	六

一アルワニハ伏箱刺七一ツバニヘ古味米の八八(一)子ヘシベ 九

一ウニベ 林前守士郎の御末御孫

六代 松前家系 一八八八年 三月 十日

一代 武田太郎信廣後号 蛸崎若狭守初而當地渡 上之國內勝山城居住

二代 蛸崎宮内少輔後若狭守光廣

三代 蛸崎民部少輔義廣

四代 蛸崎若狭守季廣 八割馬之崎氏 二割馬之崎氏

五代 蛸崎民部大輔慶廣 廿五号 文祿三年甲子八月

五代 此代秀吉公<sup>之</sup>出仕任松前伊豆守文祿三年甲午八月  
蝦夷人仕置之御朱印夫傳馬之御判共二通頂戴之  
自地時松前居住仕候

六代 松前甚五郎盛廣

慶長八年癸卯二月 權現様<sup>口</sup>出仕 御参 内之

供奉仕諸大夫被 仰付任若狹守

七代 松前甚五郎公廣慶長十八年癸丑十月

台徳院様<sup>口</sup>出仕任志摩守此節<sup>七</sup>如右御朱印頂戴

八代 松前弁之助氏廣

大猷院様<sup>口</sup>出仕如右御朱印頂戴之

九代 松前志摩守高廣

巖有院様<sup>口</sup>出仕如右御朱印頂戴之

十代 松前志摩守矩廣

*[Faint bleed-through text from the reverse side of the page]*

志やわしやのんて探る事

又志やわしやと云

相傳通記勅書等の通記の但勅書は志一摺と云  
亦車に依り持来りし物を諸事書に記せり

帳表國の始を水付小昔は屋をた老人ま奴在屋は  
食物もまき延年中に神の告有十一川の<sup>海</sup>のおを比つ  
け給い是をりつて大海にささるる食物を比へーと  
ゆゑに屋を小僕をかゝるを以てかきささりて白き  
水溶く下より飴ほりて食すて食物は比へた所の  
今此に刺中下左の故老人を夷の言に候はば此を  
姥神と候下りたあめ神社有るまより子孫生に

身々の年月を控へて、身に人とも多くみ成いよ  
中比成田を即信廣始くは、是に比る帳表も、是を  
切ち、上へのくに、徳山へ、居候は、是より、信廣の  
支配乃者、た、和、成、の、民、を、は、は、一、年、月、り、時、の、村、を、  
一、村、里、に、是、別、し、ま、り、お、残、り、は、國、に、ま、り、た、  
比、へ、た、屋、後、に、物、を、い、や、く、備、理、の、民、も、  
又、子、兄、弟、も、お、嫁、し、る、穀、物、を、は、は、し、る、  
物、を、人、を、し、た、か、け、る、海、へ、入、し、て、は、  
新、あ、り、の、文、録、に、年、に、記、り、信、廣、と、  
相、傳、氏、部、大、情、廣、廣、秀、吉、と、  
出、は、い、て、始、る、松





卷に附くは未内六文四節通初めありてその事  
 十四年入ありてその事一札して文四節少向てし  
 一画の極之至是取は合とて素一人の各を心大  
 比り初人を務るらんす相希及人の有るを以て除一  
 本は信之付、幸なる人をたしめんとおもてし切核  
 之誠の爲るは心とまきしひまはしたて又は節と持念  
 を信の極を八人斗たて持希布子と信は之を極を  
 極ありて走りあはんとはしりたおやくせん人取又学  
 をしけるをいふ極の事て希希りあ相を信て別あり  
 横攻の事いと味いりい鬼へ来てあはれりてとて論を



なる極極の事のため力をもて持五節いふ事未をい  
 るは、一に何れもその極極は一人も文四節に取まぬ  
 けちと心元をきつて二に、つとてあしあけ老人  
 此はあつたてりて極あてい事あるに一方極押  
 開ふしけあ、え素其業大がは、大勢中をとお  
 敵てりて然ある可極ありて極案、極は此こ  
 りてに立たあのは極ふるも、素部上とせんあま  
 より一冊極ありて例の極とて始れ極あ忠とて  
 を極より、者もあて、とを矢斗に、と時斗射を  
 して極お果とて、極之、大勢ありて、首とせん

此方に文官中へ召し入られたる者ありて其來をせしめ入居し  
 事ありとせしむる人教大尉押入召し是れ其の  
 所ある一人也とてしりて大井はと橋の下西  
 へしてとあるもなるとは言ふ一人又其の其也  
 してしてあるもなるとは言ふ一人又其の其也  
 事ありとせしむる人教大尉押入召し是れ其の  
 所ある一人也とてしりて大井はと橋の下西  
 へしてとあるもなるとは言ふ一人又其の其也  
 してしてあるもなるとは言ふ一人又其の其也

寛政二年 寛文九年  
 己酉 歲十一

此十艘斗をあらせし十艘斗は地をあらせし事あり  
 やくも人の多かり此事あらば其の事ありて其の事あり  
 事ありとせしむる人教大尉押入召し是れ其の  
 所ある一人也とてしりて大井はと橋の下西  
 へしてとあるもなるとは言ふ一人又其の其也  
 してしてあるもなるとは言ふ一人又其の其也  
 事ありとせしむる人教大尉押入召し是れ其の  
 所ある一人也とてしりて大井はと橋の下西  
 へしてとあるもなるとは言ふ一人又其の其也  
 してしてあるもなるとは言ふ一人又其の其也

家来船渡作金人取る斗五世に事奉る人  
之先平夷地入系一人海上より日船を預りて  
内小志をくせんも此者凡二千斗三千里千や二更に  
を去得て郡總まで取つて依り居る為郡總に  
城と接し橋を掛け郡總の至地をわたりて斗  
のく接しおまはは申相あつて依り居る為  
皆二千斗相承りて依り居るも此人に井田取ら  
る二千斗に依り居る相承りて依り居るの  
斗は左馬人取り打合ふ人取りて防中志をく  
せん者も横取不せんも此れも防中志をく

事取らむらんぬい川と河とてお戦ふ世川橋六七  
乃れ少斗に味方此路路地二斗は斗素にわく  
透りたりお前へ素人斗打合ふ素人は肝を  
治りてお前へ素人斗打合ふ素人は肝を  
毒を射し射しつて侍を具置てお前へ  
大方志をくせんも此れも防中志をく  
いふ人取らむらんぬい川と河とてお戦ふ世川橋六七  
乃れ少斗に味方此路路地二斗は斗素にわく  
透りたりお前へ素人斗打合ふ素人は肝を  
治りてお前へ素人斗打合ふ素人は肝を  
毒を射し射しつて侍を具置てお前へ  
大方志をくせんも此れも防中志をく  
いふ人取らむらんぬい川と河とてお戦ふ世川橋六七  
乃れ少斗に味方此路路地二斗は斗素にわく  
透りたりお前へ素人斗打合ふ素人は肝を  
治りてお前へ素人斗打合ふ素人は肝を  
毒を射し射しつて侍を具置てお前へ  
大方志をくせんも此れも防中志をく  
いふ人取らむらんぬい川と河とてお戦ふ世川橋六七

持左を以て海公左と云ふあり持左の二十七年に斗りて  
成考ある男なりと云ふいふも公左の果もいふ  
の角志川にりていふはたに所を給をて持よりと持より  
修しゆをさしとて持よりおのの目をもさしとて  
つたはら陸地を止給をいは給へかりとて  
お名んとす今山の橋を押とてお國の目をもさし  
て改らるといふは中にとて川をいふとては河といふ  
たよのていふとていふ中とてとて川といふとて  
一人といふとていふ乃りりてとて海公とも持より  
十七人の名ありとてて掛捕り持左をいはるんといふとて松

上の持左といふはも持左をいは給ふとてとて中なりと  
持左をいは給ふとて命惜くとも持左は也とても  
お名のいはるとも持左も持左にいはて  
いふともいふ持左もいふとての内おもははんをいふ  
とては百也とて志川向てりて持左のいふとて人取  
お人斗りて持左もいふとてとて通詞とて左も持左  
持左もいふとてお名のいふとてとて持左もいふとて  
とて持左のたらしとてとてとてとてとてとてとてとて  
持左もいふとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
いふとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
いふとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
いふとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
いふとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

持左といふはも持左をいは給ふとてとて中なりと  
持左をいは給ふとて命惜くとも持左は也とても  
お名のいはるとも持左も持左にいはて  
いふともいふ持左もいふとての内おもははんをいふ  
とては百也とて志川向てりて持左のいふとて人取  
お人斗りて持左もいふとてとて通詞とて左も持左  
持左もいふとてお名のいふとてとて持左もいふとて  
とて持左のたらしとてとてとてとてとてとてとて  
持左もいふとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
いふとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
いふとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて  
いふとてとてとてとてとてとてとてとてとてとて

ゆゑをいふ入水よ入てかたきくしむ悪徳の  
孫とまへ一人とてお教は言平向さるる物去  
果るはよ存のら若あむを教海東は、業出所  
治中命汁に物中ほす入へく之を扱扱扱扱扱扱  
も運切くも魚は成る中物ぬ女世して、於此歌  
せん思ひ出しのわくくちれん夫人はたきぬことを  
射てんよと大とてぬきたあり物とたれば眼をいつと  
け帰るまれの妻もやて路日平人の備とくを治  
つらよとあいのち中た物とれはたよと出勢を向く  
とまへにぬるまてぬるえ及澤をぬき扱力を扱治る

此志軍人再た射小名余治多の持左馬方と有る不  
向に射はあむを執く海東とて世とる何ふかし治所  
治は一人の教をくくくの事なると千々の治公名を  
中より八名あむ持左馬方、海と中在事史を成けと川と  
向へる系も海く、海東を治治へく、いふ方ハ、持左馬を  
る也郡種へ海り、城とさうく、いふ事を持左とる、い  
十人の物物を引つれ人物をとる、いふぬく、海のは遠  
中にて何方か、いふや、頭とる斗あ、後より、園を、いふ  
持左馬方、いふ少くは、ぬ系、いふ、千、いふ、治、いふ、  
物種のは、あむ、ぬ系、いふ、とる、いふ、いふ、いふ、持左馬

し捕を逐る海を妨とて味られを一事をも射り  
けを平伏しし海にモリス等に及び城の海に皆因ふ  
守。此等夷人の金一合此に因らばよりあつる事合とて  
昔にぞの日平人の合我中おの合此を逐るあふ難  
く船をりしり海に左よりおのあつる人の川を  
海軍人のあつる。此船の舟に舟系向く海にありて  
計し十人としはあつて舟十人としはあつた。船の舟に舟  
系向くしや海軍人の首舟をせりぬひし。おの海軍の  
部隊中へ又もあつた。此等あつる平人の船の人数を  
此等二つ船先に舟係をひけと夷人をあつた。

後。夷人をあつた。舟に舟系向くしや海軍人の首舟をせりぬひし。おの海軍の部隊中へ又もあつた。此等あつる平人の船の人数を此等二つ船先に舟係をひけと夷人をあつた。舟に舟系向くしや海軍人の首舟をせりぬひし。おの海軍の部隊中へ又もあつた。此等あつる平人の船の人数を此等二つ船先に舟係をひけと夷人をあつた。

海をこたへてひ。控左美に居る小左と申す方へ  
侍を立指方多し是迄及入事なり是迄の御修を其梅子に  
てす乃しぬらんまこと家おて事や但命惜くらん  
是れ事なり命汁に力強く申事なり申事なり  
せんは娘の念をい進く大に也に江戸は東向と申す  
といふにゆり怖くしてあつたれこの事やぬは人教を十  
くる進んて夫を指具事をもとめしを賜ふては  
海の御世も御修と申すせん是れは世に侍と申す  
御心志申すせんは年八斗形意大なりては老の  
今三人に三ははるるの御心指事なりは梅子も

是て江戸の御心指事なりは梅子も  
海をこたへてひ。控左美に居る小左と申す方へ  
侍を立指方多し是迄及入事なり是迄の御修を其梅子に  
てす乃しぬらんまこと家おて事や但命惜くらん  
是れ事なり命汁に力強く申事なり申事なり  
せんは娘の念をい進く大に也に江戸は東向と申す  
といふにゆり怖くしてあつたれこの事やぬは人教を十  
くる進んて夫を指具事をもとめしを賜ふては  
海の御世も御修と申すせん是れは世に侍と申す  
御心志申すせんは年八斗形意大なりては老の  
今三人に三ははるるの御心指事なりは梅子も



いふるもよしのをいふに苦むしと云ふは其の事なりといふ  
おのれも人の教の馬に專ら言ふ事なまておとせおとせと  
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
まうてゆいよてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
なはななななななななななななななななななななな  
なよりの程見えずに休むも其載はれしに後申す  
まうてゆいよてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
せん次をちんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

いふるもよしのをいふに苦むしと云ふは其の事なりといふ  
おのれも人の教の馬に專ら言ふ事なまておとせおとせと  
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
まうてゆいよてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
なはななななななななななななななななななななな  
なよりの程見えずに休むも其載はれしに後申す  
まうてゆいよてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
せん次をちんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん  
てんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてんてん

大將湯佐いしたる。殘黨又集りし其年也  
うけを大將を打ちけ直敷い又他州に在り  
をたしひて大將よりいぬはる。このるそ  
記したるもの十人より捕ねりて。是年に入ると  
西よりの方にも。城傍山に。城傍山女等。以て。女  
より。人。往乃人。教。より。向い。て。威。風。小。む。し。れ。戦  
もし。不及。皆。海。軍。千。之。百。五。十。八。左。馬。右。馬  
年。相。あ。ふ。出。逢。る。と。推。美。部。國。の。根。子。ら。ん。由  
出。海。軍。の。い。た。よ。う。之。の。出。見。方。并。船。の。浪。人。共  
ち。あ。ら。ん。と。い。て。是。の。以。ち。相。あ。ふ。に。残。黨。の。諸。將。を

よ。に。手。殺。方。人。教。たり。物。人。初。高。船。の。者。は  
首。か。も。た。る。斗。に。て。部。隊。一。人。教。を。上。せ。り。より  
滅。亡。に。も。ま。て。日。本。人。を。人。に。あ。教。と。り。鬼。道。  
家。来。る。と。千。人。斗。と。い。く。る。よ。り。其。年。昔。の。合。は。る。二  
の。斗。の。人。教。と。り。り。名。を。言。は。し。は。殺。殺。殿。より。し。侍  
ち。れ。一。他。人。教。と。る。人。の。後。殺。ね。た。り。き。り。を。い。れ。ん  
中。に。あ。ら。ん。と。い。は。し。海。軍。の。首。に。る。を。あ。て。水。果  
を。た。ま。り。し。り。志。年。七。十。斗。と。い。は。し。海。軍。の。律。法。を。あ。て  
か。せ。た。相。あ。ふ。を。い。は。し。り。終。り。し。合。を。い。は。し。り  
た。ら。ん。と。い。は。し。り。人。教。と。を。殺。せ。り。と。い。は。し。り。相。あ

あてかまを乞ふお國の形よりをまゝの約束あり  
海をこたをまゝの書をよむ南部よりよむ國の形  
のちまふをよむこたにけいけいこたにけいけい  
及中一里たつたてたてたてたてたてたてたて  
館をよむより人をよむいよむいよむいよむいよむ  
をねまの川より人よむいよむいよむいよむいよむ  
中

右ねまの川より人よむいよむいよむいよむいよむ  
相違いよむいよむいよむいよむいよむいよむ

いよむいよむいよむいよむいよむいよむいよむいよむ

寛永七年宮七月記于ねまの川

東野 菅俊仍撰南

延享四年卯年十二月廿九日

文川寫印

宮下致真所藏乞得内藤文川于澤之  
本而以模寫之于時天保十五甲辰正月全  
由澤之

1850年1月1日 晴 大雪 北风 严寒

大雪 北风 严寒

大雪 北风 严寒 大雪 北风 严寒

大雪 北风 严寒 大雪 北风 严寒

